

特定健康診査の検査項目と検査でわかること

検査項目		この検査でわかること
肥満	腹囲	内臓脂肪の程度を調べることができます。 たとえ体重が適正であっても、内臓脂肪が過剰にたまると、糖尿病や心筋梗塞、脳卒中などを引き起こしやすくなります。
	BMI	体重が適正かどうかを数値であらわします。以下の式で算出します。 BMI＝体重（kg）÷身長（m）÷身長（m） 数値が 18.5 未満は低体重、25 以上だと肥満です。
血圧測定	血圧	「収縮期血圧」は心臓が血液を身体に送り出すときの血圧で、「拡張期血圧」は心臓が血液を心臓に戻すときの血圧です。 高血圧の状態が続くと動脈硬化を招きやすく、心筋梗塞や脳卒中を引き起こす要因となります。
血液検査	中性脂肪（TG）	中性脂肪は主にエネルギーとして利用され、余りは脂肪として体内に蓄積されます。食べ過ぎや飲み過ぎ、肥満によって数値が高くなり、動脈硬化や脂肪肝を引き起こす要因となります。
	HDL コレステロール	善玉コレステロールともいい、血管内の悪玉コレステロールを取り去り、排泄・処理をする肝臓へ運ぶ働きがあり、動脈硬化を予防します。 有酸素運動などにより増加し、肥満や喫煙により減少します。
	LDL コレステロール	悪玉コレステロールともいい、量が多くなると血管の内側に付着してたまり、動脈硬化を進めます。さらに血管をふさいで血流を遮断し、心筋梗塞や脳梗塞を引き起こします。
	AST（GOT） ALT（GPT）	AST は心筋や骨格筋の細胞に多く含まれ、この数値が高いと心臓や筋肉などの異常や障害が疑われます。ALT のほとんどは肝細胞に含まれ、この数値が高いとウイルス性肝炎、アルコール性肝炎、脂肪肝などの肝臓障害が疑われます。 とくに内臓脂肪型肥満の人は、脂肪肝に要注意です。また、AST と ALT は肝臓の障害の程度を示すため、2つの数値を比較することで病気の種類を推測することができます。
	γ-GT （γ-GTP）	肝臓や胆道に障害があると数値が高くなります。 AST・ALT と同様に肝臓障害の発見の手がかりとなります。また、アルコール常飲者では数値が高くなることから、アルコール性肝炎発見の指標ともなります。
	空腹時血糖 または 随時血糖	血糖とは血液中のブドウ糖のことをいいます。 血糖値が上がると、すい臓から分泌されるインスリンというホルモンが血糖を下げようとします。インスリンが不足したり作用が足りないと血糖値は下がらず、高血糖と判定されます。
	HbA1c （HbA1c）	過去1～2か月の平均的な血糖の状態を調べることができます。 また飲食によって変動する血糖値と異なり、HbA1c はほとんど影響を受けないので、糖尿病が疑われた時の検査として有効です。

	赤血球数 血色素量	赤血球と血色素は体中に酸素を運ぶ役割をもちます。 貧血症や多血症などを判定します。
	ハトクリット値	血液中の血球成分の割合をいいます。 貧血症などの診断補助となります。
	血清クレアチニン	体内でエネルギーとして使われた蛋白の残り、腎障害の指標となります。
	尿酸	尿酸は体にとって不要な老廃物です。尿酸値が高すぎると痛風を引き起こす場合があります。
尿検査	尿蛋白	腎臓に異常がある場合に尿中に現れることがあります。
	尿糖	血糖値が高くなりすぎると、尿中に糖が現れるようになり、糖尿病の程度を判断することができます。
医師が必要と認めた場合	心電図検査	心臓の筋肉に起こった電気的変化を波形に表し、その様子から異常の有無、程度をみます。不整脈、心臓肥大、狭心症、心筋梗塞など心臓の病気を発見する検査です。
	眼底検査	眼底カメラや眼底鏡という器具を用いて、眼球の奥にある血管や網膜などの状態を調べる検査です。高血圧、動脈硬化、糖尿病などによる眼底の血管の変化をみます。